

翻字本文 凡例

- 一、翻字は、複製本『善信聖人親鸞伝絵』（続々日本絵巻大成、伝記・縁起篇1、中央公論社、一九九四年）に基づく。ただし、巻第一の巻頭は、専修寺宝物特別展観によって、原本で確認した（一九九八年四月六日）。また、画中の詞は、翻字の対象としていない。
- 一、原本の配行・字詰を保ち、訓点・諸符号をも出来るだけ忠実に翻字するよう努めた。しかし、製版の制約上十分でない場合がある。常に複製本と照合されんことを期待する。
- 一、漢字の字体は、JIS規格で利用できる範囲において通行の康熙字典所載の正字体に従うことを原則とした。ただし、原本の字体のままにしたものがある。
- 一、平仮名・片仮名の字体は、現行の字体に改めた。
- 一、漢字に加えられた声点は、漢字の右下に（平）（平軽）（上）（去）（入軽）（入）として示した。
- 一、虫損・破損は、□で示し、その欠落箇所は残画からの類推あるいは他本に依って（ ）内に補った。
- 一、本文の振り仮名および左右の注には、後筆と見られるものがある。これは、 に入れて区別した。
- 一、本行の○は、原本に存する補入符である。
- 一、本翻字本文は、佐々木勇・花岡健吾・上野真・児玉拓世・佐藤理絵・寺田守で読み進めた原稿を元に、第一次稿を佐藤理絵が作成し、佐々木勇・佐藤理絵・寺田守・田中哲宙・森田朋子で入力した。
- 一、製版にあたっては、金水敏氏のホームページ「ALEXによる古典籍のコード化のためのマクロ作成」で公開されているマクロを使わせていただいた。
- 一、製版のものとファイル作成には、寺田守提案の方式がとられ、入力全般に亘って同氏の尽力が大きかった。

〔卷一〕

一 善信聖人親傳繪センシンシヤウニンシンテンエン

二 夫聖人の俗姓は藤原氏天兒屋根ソレシヤウニンソクシヤウフチハラウチアマツコヤネノ

三 命二十二世の苗裔大織冠鎌子大臣のミコニジュニセヘウエキタイシヨクワンカマコノタイシン

四 玄孫近衛大将右大臣クエンソンコンノエンタイシヤウウタイシン

カウスノチノナカオカタイシントアルイハ
号ニ後長岡大臣一或号ニ
(カウスカンイン)
(院)

從一位内曆シユキチキウチマロ

贈正一位太政大臣房前公ソウシヤウキタイシヤウフササキノコ
(孫)

大納言式部卿真楯息タイナウコンシキフキヤウサネマタノソクナリ
(也)

五 六代の後胤弼宰相有國卿五代の孫皇太后ロクタイコウイムヒチノサイシヤウアリクニノキヤウコタイソククワウタイコ

六 宮大進有範の子也しかあれば朝廷クノタイシンアリノリコナリテウテイ

七 に仕て霜雪をも戴射山に趨てツカヘテサウセチイタヘキヤサンウシ

八 榮花をも發へかりし人なれともエイクラフヒラク

九 興法の因うちにきさし利生のコウホフコウホフインリシヤウ

一〇 縁ほかにもよをひしによりて九エン

一〇 歳の春比阿伯從三位範綱卿サイハルノコロアハクシユサムキノリツナノキヤウサノカミコシラカハノシヤウクワウ
于二時一從四位上(サキノワカサカミ)前若(近)

臣也上人養父シンナリシヤウニンノヤウフ

一二 前大僧正サキノタイソウシヤウシユンシチンクワシヤウコレナリ
慈圖慈鎮和尚是也
法性寺殿御息月輪殿長兄
の貴坊へ

相具しアヒク

一三 たてまつりて鬢髪を剃除し給きヒンホツタイチヨ

一四 範宴少納言公と号す自爾一以来しはくハンエンセウナウコンノキミカウヨリシカリシコノカク

一五 南岳天台の玄風を訪てひろく三觀ナムカクテントウタイクエンフ「トブラウ」テひろくサムクワン

一六 佛乘の理を達しとこしなへに楞フチシヨウウリリタクチリヨウ

一七 嚴横川の餘流を湛てふかく四教コム「ワウセン」ヨリウタハヘシケウ

一八 圓融の義に明なりエンユキアキラカ

一九 建仁第三の曆春のころケンニンタイサムレキハルシヤウニンイム
聖人隱
廿九歳

二〇 遁のころさしにひかれて源空聖トンソウケンクシヤウ

二一 人の吉水の禅房に尋參たまニンヨシミツセンハウタツネマイリ

二二 ひきは是則世くたり人つたなコレスナワチヨ

二三 くして難行の小路まよひやすきナンキヤウセウロ

- 一 24 によりて易行の大道におもむ
- 一 25 かんとなり真宗紹隆の大祖聖人
- 一 26 ことに宗の渊源をつくし教
- 一 27 の理致をきわめてこれをのへ
- 一 28 たまふに立ところに他力攝生の
- 一 29 旨趣を受得し飽まで凡夫直
- 一 30 入の真心を決定しまし／＼けり
- 一 31 建仁三年四月五日夜寅時聖
- 一 32 人夢想告まし／＼き彼記云六角堂
- 一 33 の救世菩薩顔容端嚴の聖僧の形
- 一 34 を示現して白納の袈裟を着服せ
- 一 35 しめ廣大の白蓮花に端座して
- 一 36 善信に告命して言行者宿報設
- 一 37 女犯我成玉女身被犯一生之間能莊
- 一 38 嚴臨終引導生極楽文救世菩薩
- 一 39 善信に言此是我誓願也善信此誓

- 一 40 願の旨趣を宣説して一切群生に
- 一 41 きかしむへしと云々尔時善信夢中
- 一 42 にありなから御堂の正面にして
- 一 43 東方をみれば峨々たる岳山あり
- 一 44 その高山に数千万億の有情群
- 一 45 集せりとみゆそのとき告命
- 一 46 のことく此文のころをか山に
- 一 47 あつまれる有情に對て説きかし
- 一 48 めをはるとおほえて夢悟了云々倩
- 一 49 此記録を披て彼夢想を案する
- 一 50 にひとへに真宗繁昌の奇瑞念佛
- 一 51 弘興の表事也然者聖人後時被
- 一 52 仰云佛教むかし西天より興て經論
- 一 53 いま東土に傳る是偏に上宮太子
- 一 54 の廣徳山よりも高く海よりも
- 一 55 深し吾朝欽明天皇の御宇に

- 一 56 これをわたされしによりて即浄土
- 一 57 の正依經論等此時に來至す儲君シヤウエキヤウロントウコノトキライシチ(目)クン
- 一 58 もし厚恩をほとこしたまはすはコウトクアツキオム
- 一 59 凡愚いかてか弘誓にあふ事を得ホムククセイヤクセ
- 一 60 ん救世菩薩は即儲君の本地なればクセホサチスナフチヨクンホンチ
- 一 61 垂迹興法の願をあらわさんかたスイシヤクコウホフクワシ
- 一 62 めに本地の尊容をしめすところ也ホンチソノヨウ
- 一 63 抑又大師聖人ソモ、タイシシヤウニンクエンもし流刑にルケイ
- 一 64 處せられたまはすはわれまた配所シヨハインシヨ
- 一 65 に赴かんやもしわれ配所におもオモムハインシヨ
- 一 66 むかすは何由か邊鄙の群類を化せんナニ、ヨテヘンビクンルイクエ
- 一 67 これなを師教の恩致なり大師聖人シカウオムチタイシシヤウニン
- 一 68 すなわち勢至の化身太子又觀音のセイスクエシンタイシクワシオム
- 一 69 垂迹スイシヤクなりこのゆへにわれ二菩薩のニホサチ
- 一 70 引導に順て如來の本願をひろむインダウシユンニヨライホンクワン
- 一 71 るにあり真宗因茲興し念佛由斯シンシユヨコレニコウネムフチヨテコレニ

- 一 72 煽なり是併聖者の教誨によりてサカムコレシカシナカラシヤウシヤケウクエ
- 一 73 更愚昧の今案をかまへす彼二大士サラニクマイコムアンカノニタイシ
- 一 74 の重願唯一佛名を專念するにたチウクワンタ、キチフチミヤウセンネム
- 一 75 れり今の行者錯て脇士に仕ことなイマキヤウシヤアヤマケウシツカフル
- 一 76 かれ直に本佛を仰へしと云々かるチキホンフチアオク
- 一 77 かゆへに聖人シヤウニン親ラシ傍に皇太子を崇アカメ
- 一 78 たまふ蓋斯佛法弘通の浩なる恩ケタンコレフチホフクツオホイオム
- 一 79 を謝せんかためなりシヤ

〔卷二〕

- 一 1 黒谷の先徳クロタニセントククエンサイセ在世のむかし矜哀コウアイ
- 一 2 の餘或時は恩許を蒙て製作をアマリアルトキオムキヨカフリセイサク
- 一 3 見寫し或時は真筆を降て名字ケンシヤアルトキシシンヒチクダシミヤウシ
- 一 4 を書賜すなわち顕浄土方便化身土文カキタマハルケンシヤウトハウヘンクエシントノモン
- 一 5 類六云ルイノニク親シラシヤウシカルニク鸞シヤクノランケンニシムイワノレキ建仁辛酉曆ニケンシンユツ然愚禿釋鸞ニケンシンユツ建仁辛酉曆ニケンシンユツ
- 一 6 棄ステ雜行ニサフキヤヲテクホス一兮歸二本願ホンクワンニク元久乙丑歳蒙恩恕一兮書二選ニクエンキウキノトウシノトシカフリ(テ)オムシヨラテシヨシキセン

- 一7 擇チヤクヲ 一 同年初夏中旬 第四日選擇 本願念佛
- 一8 集内題字并 南無阿弥陀佛往生之業念佛
- 一9 爲ス 二本ホント 与ト 二釋シヤク 綽空モテクノシンヒチヲ 以シ 二空真筆カ、 一令シ 三書カ、 二之シ 一 同 日空
- 一10 之真影申 預 奉 二 圖畫 一 同 二年閏七月下旬
- 一11 第九日真影銘以 二 真筆 一 令 二 書 南無阿弥陀
- 一12 佛与若我成佛十方衆生稱我名号下至十
- 一13 聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛
- 一14 當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生之
- 一15 真文又依 二 夢告 一 改 二 綽空字 一 同 日以 二 御筆 一 令 三 書
- 一16 名之字 一 了 本師聖人今年七旬三御歳也
- 一17 選擇 本願念佛集者依 二 禅定 博陸 ツキノワノトノケンシチ 月輪 殿 兼實 法名 圓照
- 一18 之教命 一 所 三 令 二 撰集 一 也 真宗之簡要念佛之
- 一19 奥義攝三 在于 二 斯 一 見者易 二 論 一 誠 是希有最
- 一20 勝之華文無上甚深之寶典也 涉 二年 一 涉 二 日
- 一21 蒙 二 其教誨 一 之人雖 二 千萬 一 云 二 親 一 云 二 疎 一 獲 二 此

- 一22 見寫 一 之 徒 甚 以 難 爾 既書 二 寫 製作 一 圖 二 畫
- 一23 真影 一 是 專念 正業之徳也 是 決定 往生
- 一24 之 徴 也 仍 抑 二 悲喜之 涙 一 註 二 由 一 来 之 縁 一 云 々
- 一25 おほよそ 源空聖人 在生 の 古 他力
- 一26 往生の旨をひろめたまひしに世あ
- 一27 まねくこれに 挙人 こと 〳〵 〳〵
- 一28 れに 歸 紫 一 志 禁 一 青 一 宮 一 政 一 重 一 する
- 一29 砌にも 先黄金樹林の 萼 に 〳〵 〳〵
- 一30 を かけ 三 一 平 懸 一 槐 一 平 九 一 平 懸 一 棘 一 入 の 道 を 正 する 家
- 一31 にも 直 四十八願の月をもてあそぶ
- 一32 如之 戒 一 平 濁 一 狄 一 入 の ともから 黎 一 平 一 民 一 平 の たくひこ
- 一33 れをあふきこれをたふとひすといふ
- 一34 ことなし 貴賤 轅 をめくらし 門前
- 一35 市をなす 常随 昵近の 緇徒 そのかす
- 一36 あり 都て 三百八十余人と云々しかあ

- 一 37 りといへとも 親マノアタリソ その化を受ウケネム 懃コロニ その
 一 38 誨オシヘを守マモル 族ヤカラはなはたまれなり善信センシン或アル
 一 39 時トキ申たまはく予ヨ難行道ナニキヤウダウを閣サシオイて
 一 40 易行道イキヤウダウにうつり 聖道門シヤウダウモンを遁ノカレて
 一 41 淨土門シヤウトモンに入イリしより以来コノカタ 芳命ハウメイをかう
 一 42 ふるにあらすよりは 豈アニ出離シユツリ解脱ケタチ
 一 43 の良因ラウインを 蓄タクハヘン 哉喜ヤヨロコヒの中の悦ヨロコヒ 何事ナニコト
 一 44 か如シカンニ之コレニしかあるに同室トウシチの好ヨシミを結ムスビてとも
 一 45 に一師イチシの誨オシヘをあふくともからこれお
 一 46 ほしといへとも 眞實シンシチに報土ホウト得生トクシヤウの
 一 47 信心シンシムを成シヤウしたらむ事シタ 自他ジタをなし
 一 48 くしりかたし 故カレユヘに且カッは當来タウライの親友シンユウ
 一 49 たる程ホトをもしり且カッは浮生フシヤウの思出オモヒテ
 一 50 ともし侍ハハらんかために御弟子オムテシ 參集サムシフの
 一 51 砌ミキリにして 出言シユツゴンつかうまつりて面々メンメンの意イ
 一 52 趣シユを 試コノロミムと思シヨマウふ所望シヨマウありと云々タイシ 大師タイシ

- 一 53 聖人シヤウニン云ク此条コノテウモトモ尤可ヘシ 然シカル 一 即スナワチ 明日ミヤウニチ 日人ヒト々々ヒト 来臨ライリン
 一 54 の時トキおほせられいたすへしと 而シカルニ 翌日ヨクシチ
 一 55 集會シフエのところに 聖人シヤウニン親シンのたまはく
 一 56 今日ケフは 信不退行シンフタイキヤウフタイの御座コサを 兩方リヤウハウに
 一 57 わかたるへきなり 何イツレの座サにつきたま
 一 58 ふへしともおの 示シメ 給タマヘと 其時ソノトキ 三百余ヨ
 一 59 人ニンの門侶モンリヨみな 其意ソノコホロを得エさる氣キあ
 一 60 り于ニ 二時トキ 法印ホフイン 和尚ワウシヤウキ 位セイ 聖覺セイカク 并ナラヒ 釋シヤクノ 信空シンク 法蓮ホフレン
 一 61 信不退シンフタイの御座コサに 可ヘシ 着ツク 一と云々ツキ 次ツギに 沙弥シヤミ
 一 62 法力ホフリキ 直實チサネ 遲參チサンして 申マフシテ 云ク 善信センシン 聖人シヤウニン
 一 63 御執筆コシフヒチ 何事ナニコトソヤ 哉ヤと 善信センシン 聖人シヤウニンのたまはく
 一 64 信不退行シンフタイキヤウフタイの座サを わけらるゝ也
 一 65 と 法力ホフリキ 房申ハウテ 云ク 然者シカレハ 法力ホフリキもるへからす
 一 66 信不退シンフタイの座サに まいるへしと云々ヨテ 仍ヨテ
 一 67 これを 書載カキノセたまふこゝに 數百人シユヒヤクニンの

- 二68 門徒群居すといへともさらに一言を
 二69 のふる人なし是 恐は自力の迷心
 二70 に拘て金剛の真信に昏かいたすと
 二71 ころか人みな無音のあひた執筆
 二72 上人親自名をのせたまふ良しは
 二73 らくありて大師聖人被仰云源空も
 二74 信不退の座につらなり侍るへし
 二75 とこのとき門葉或は屈敬の氣
 二76 をあらはし或は鬱悔のいろを
 二77 ふくめり
 二78 聖人親のたまはくいにしへ
 二79 我大師聖人の御前に聖信房勢觀
 二80 房念佛房已下人々おほかりし
 二81 時はかりなき諍論をし侍る事
 二82 ありきそのゆへは聖人の御信心と
 二83 善信か信心といさゝかもかはるとこ

- 二84 ろあるへからすたゝひとつなりと申
 二85 たりしにこの人々とかめて云善信
 二86 房の聖人の御信心とわか信心とひと
 二87 しと申さるゝこといはれなしいか
 二88 てかひとしかるへきと善信申云なとか
 二89 ひとしと申さゝるへきそのゆへは
 二90 深智博覧にひとしからんとも申さ
 二91 はこそまことにおほけなくもあら
 二92 め往生の信心にいたりては一たひ他力
 二93 信心のことはりを承しよりこのかた
 二94 またくわたくしなしかれば聖人の
 二95 御信心も他力よりたまはらせたまふ
 二96 善信か信心も他力也故にひとしくし
 二97 てかはるところなしと申也と申侍
 二98 りしところに大師聖人まさしく
 二99 被仰云信心のかはると申は自力の信

100 にとりてのことなりすなわち智恵各別

101 なるゆへに信又各別也他力の信心

102 は善悪の凡夫ともに佛のかたよりのた

103 まはる信心なれば源空か信心も善信

104 房の信心もさらにかはるへからすたゝ

105 一なりわかかしこくて信するにあらず

106 信心のかはりあふておはしまさん人々

107 はわかまいらむ浄土へはよもまいらせた

108 まはしよくくくろえらるへき事

109 なりと云々こゝに面々舌を巻口を閉て

110 やみにけり

〔卷三〕

111 浄土宗興行によりて聖道門廢退

112 是空師の所爲なりとて忽罪科せ

113 らるへきよし南北の碩才鬱申けり

114 顯浄土方便化身土文類六云竊以聖道諸教行

115 證久廢浄土真宗證道今盛然諸寺釋門昏二

116 教一兮不三知真假門戸一洛都儒林迷一行一兮無三辯二邪

117 正道路一斯以興福寺學徒奏二達 太上天皇

118 諱尊成 今上一 諱 爲仁 号二 聖曆 承元 丁卯歲

119 旬之候 主上臣下背二法一違二義一成一 忿一 結二 怨一 因二

120 茲一真宗興隆太祖源空法師并門徒數輩不三

121 考二罪科一 猥 坐二死罪一 或 改二僧儀一 賜二姓名一

122 予其一也尔者已非レ僧非レ俗是故以ニ禿字ニ爲ニ姓ニ

123 空師并弟子等坐ニ諸方邊州一經ニ五年之居緒一

124 云 空聖人罪名藤井元彦配所土佐國幡鸞

125 上人罪名藤井善信配所越後國此外の

126 門徒死罪流罪みな略ニ之一 皇帝 諱 爲仁 号二

三17 聖代建曆 辛 未 歳子月 中旬 第七日 中納言 範光

三18 郷をもちて 勅免 此時上人 右のこごとく

三19 禿字を 書て 奏聞し 給ふに

三20 陛下 叡感を くだし 侍臣おほきに 保

三21 美す 勅免ありといへともかしこに

三22 化を 施さんためになをしはらく在

三23 國し 給けり

〔卷四〕

四1 聖人 越後國より 常陸國に 越て 笠間

四2 郡 稻田郷と云ところに 隠居したまふ

四3 幽栖 を占といへとも 道俗跡を 尋蓬戸

四4 を閑といへとも 貴賤衢に 溢佛法 弘通

四5 の本懐こゝに 成就し 衆生利益の 宿念

四6 たちまちに 満足す 此時 聖人被 二仰一

四7 云 救世菩薩の 告命をうけし 往夢

四8 既今与符合せりと

四9 聖人 常陸國にして 一向 專修の

四10 義をひろめたまふにおほよそ 疑謗

四11 の輩は 少 信順の 族は多し 而一人

四12 の僧 ありて 動 は 佛法に 怨を成

四13 つゝ 結句 害心を 挿て 聖人を 時々うかゝ

四14 いたてまつる 聖人 板敷山と云 深山を

四15 恒に 往反したまひけるに 彼山

四16 にして 度々 相待といへとも 更其節

四17 をとけす すらく 事の 參差を 案に

四18 頗 奇特の 思あり 仍 聖人に 謁せん

四19 とおもふ心 付て 禪室に 行て 尋申

四20 に 聖人 左右なく 出會たまひにけり

四21 すなわち 尊顔に むかふに 害心 忽に

- 四22 消滅して 剩後悔の涙 禁かたし良
セウメチ アマサヘコウクワイ ナシタ キムシ イマシメ
- 四23 斲ありて有のまゝに日者の宿鬱
シハラク アリ ヒ コロ シユクワツ
- 四24 を述すといへとも聖人またおとろけ
シユツ シヤウニン
- 四25 るいろなし立ところに弓箭を
タチ キウセム
- 四26 切刀杖を捨頭巾を取柿衣を改て
キリタウチャウ ステトキム トリカキノコロモ アラタメ
- 四27 佛教に歸しつゝ終に素懷を遂き不
フチケウ ツヒ ソクワイ トケ
- 四28 思議なりし事也すなわち明法房
シキ コトナリ ミヤウホフハウ
- 四29 是也聖人つけ給き
コレナリシヤウニン ケ
- 四30 聖人東関の堺を出て花城の路に
シヤウニン 「トウクワン」 サカヒ イチ クワセイ ミチ
- 四31 起まし／＼けり或日晚陰に及て箱根
オモムキ アルヒ ハム イム オヨヒテ ハコネ
- 四32 の險阻にかゝりつゝ遙行客の蹤を送
ケンソ ハルカニカウカク アト オクリ
- 四33 て漸人屋の樞に近に夜もすてに
ヤウヤク シムワク トホソ チカツク ヨ
- 四34 曉更にをよむて月もはや孤嶺に
ケウカウ コレイ
- 四35 かたふきぬ于二時一聖人あゆみよりつゝ案内
ニ トキ シヤウニン アンナイ
- 四36 し給ふにまことに齡傾たる翁のうる
「齡」 レイクキヤウ ヲキナ ヨロイカタフキ
- 四37 はしくしやうそきたるかいとこととく

- 四38 出會て云やう社廟ちかき所のならひ
イテアフ ヲコロ トコロ カムナキ
- 四39 ともの夙夜あそひし侍るにおきなも
ヨモスカラ ハヘ
- 四40 ましわりつるかいさゝか寄る侍ると思
ヨリ オモフ
- 四41 ほとに夢にもあらずうつゝにもあら
ユメ
- 四42 て權現被ニ仰一云只今我尊敬をいたすへき
コンケンラレテ オホセ クタ、イマワカソシヤウ
- 四43 客人此路を過給へきことあり 必慇
キヤクシンコノミチ トマリ カナラスイム
- 四44 懃の忠節を抽て殊丁寧の饗應を
キム チウセチ ヌキムテ コトニテイネイ キヤウオウ
- 四45 儲へしと示現いまた覺終さるに貴
マウケ シケン サメヲハラ クキ
- 四46 僧忽として影嚮したまへり何
ソウコツ ヤウカウ ナンツ
- 四47 たゝ人にましまさん神勅是炳焉
シンチヨクコレ ヘイエン アキラカナリ
- 四48 なり感應最恭敬すと云て尊重岨請
カンオウモトモクキヤウ イフ ソンチウクツシヤウ
- 四49 したてまつりてさま／＼に飯食を粧
シタテマツリテ サマ／＼ ホムシキ ヨソオヒ
- 四50 いろ／＼に珍味を調けり
チムヒ ト、ソ、ヘ
- 四51 聖人古郷に歸て往事をおもふに
シヤウニンコキヤウ カヘリ ワウシ ムカシノコト
- 四52 年々歳々夢のことし 幻のことし
ネン、サイ、ユメ マホロシノ

四53 長(平)安(平)整(洛)入(入)陽(平)の栖も蹤をとむるにモノウシ嬾
 四54 とて扶(平)風(平)馮(平)翊(入)とところへに移住したウツリスム
 四55 まひき五条西洞院わたり是一の勝地なり
 四56 とてしはらく居を卜たまふ今此いに
 四57 しへ口決を傳面受を遂し門徒等のを
 四58 おの好を慕路を尋て參集たまひ
 四59 けりそのころ常陸國那荷西郡大部
 四60 郷に平太郎なにかしと云庶民あり
 四61 聖人の訓を信て專一なかりき而或
 四62 時件平太郎所務に駈て熊野に詣へ
 四63 してとて事由を尋申さむために聖人
 四64 へ參たるに被仰云夫聖教万差也いつ
 四65 れも機に相應すれば巨益あり但末
 四66 法の今時聖道の修行にをきては成す
 四67 へからすすなわち我末法時中億々衆
 四68 生起行修道未有一人得者と言唯有淨

四69 土一門可通入路と云々此皆經釋の明文如
 四70 来の金言也而今唯有淨土の真説に就
 四71 て忝彼三國の祖師各此一宗を興行す所以に
 四72 愚禿勸とて更わたくしなし然に一
 四73 向專念の義は往生の肝腑自宗の骨目也即
 四74 三經に隱顯ありといへとも云レ文云レ義共明
 四75 哉大經の三輩にも一向と勸て流通
 四76 にはこれを弥勒に咐囑し觀經の
 四77 九品にもしはらく三心と説て是又
 四78 阿難に咐囑す小經一心説舎利弗二咐囑終に諸佛
 四79 證誠す因之論主一心と判し和尚一向
 四80 と釋す然則何の文に□りて一向專修
 四81 の義立へからざるそや證誠殿の本
 四82 地すなわちいまの教主なりかるかゆへ
 四83 に左も右も衆生に結縁の志ふかき
 四84 によりて和光の垂迹を留たまふ

四85 垂迹をとむる本意たゝ結縁の

四86 群類をして願海に引入せんとなり

四87 しかあれば本地の誓願を信して一

四88 向に念佛をことゝせむ輩公務にも

四89 したかひ領主にも駆仕てその靈地

四90 を踏その社廟に詣せん事更に

四91 自心の發起するところにあらず然者

(以下欠)

〔卷五〕

五1 聖人弘長二年仲冬下旬の候よりい

五2 さゝか不例の氣まします自尔此来口に

五3 世事をましへすたゝ佛恩のふかきこ

五4 とをのふ聲に餘言をあらわさすも

五5 はら稱名たふることなし而同第八日

五6 頭北面西右脇に臥したまひてつるに

五7 念佛の氣たへをはりぬ于二時一類齡九

五8 旬に満たまふ禪房は長安馮翊の邊

五9 押し小路なればはるかに河東の路を曆

五10 て洛陽東山の西麓鳥部野の南邊延

五11 仁寺に葬したてまつる遺骨を拾て

五12 同山麓鳥部野の北邊大谷にこれをお

五13 さめをはりぬ而終焉にあふ門弟勸化

五14 をうけし老若をのく在世のいにしへ

五15 を思滅後のいまを悲て恋慕涕泣せすと

五16 いふことなし

五17 文永九年申冬比東山西麓鳥部野の北大

五18 谷の憤慕をあらためて同麓よりなを

五19 西吉水の北邊に遺骨を掘渡して佛閣

五20 を立影像を安す此時に當て聖人相

五21 傳の宗義いよく興し遺訓ますく

五22 盛こと頗在世の昔に超たりすへて

五23 門葉國郡モンエウコククンに充満シユマンし末流處マチリウシヨ々に遍布ヘムフ

五24 して幾イクセン千ハン萬マンといふことをしらす其ソノ

五25 稟ホム教ケウを重オモムして彼報謝カノホウシヤを抽ヌキムツる輩トモカラシ緇ウクオンヘラ緇トモカラシ

五26 素老少面ソラウセウメン々ンあゆみユを運ハコヒて年ネン々ン

五27 廟堂ヘウタウに詣ケイす凡オホヨソシヤウニシヤウ聖人在生アヒタキトクの間奇特キトクこ

五28 れおほしといへとも羅縷ラロウスルに不ス違(ママ)仍イトマヨテ

五29 しかしなからこれを略リヤクするところ

五30 なり

五31 右縁起畫圖之志偏爲知恩報徳

五32 不爲戲論狂言剩又馳紫毫拾翰林

五33 其躰尤拙其詞是苟付冥付顯有

五34 痛有恥雖然只憑後見賢者之

五35 取捨無顧當時愚案之紕繆而已

五36 于時永仁第三曆乙未應鐘仲旬第二天

五37 至于晡時終草了 執筆衡門覺如

五38 今同歲太呂仲旬第三天又書之